

初等教育教員養成課程学生の原体験度認知を 促す指導法の試み

～いかに原体験の引き出しを広げさせるか～

福井広和（就実大学）

Attempt of teaching methods to encourage proto-experience degree
recognition of primary education teacher training course students

FUKUI Hirokazu (Department of Elementary Education)

要約 本研究は初等教育教員養成課程学生の「原体験の引き出し」をいかに広げさせるか、そのきっかけとなる授業運営法についての試みである。生活科に代表される幼少期の自然体験学習の成否は教師の力量や経験に依存する部分が多い。一方で教員を目指す大学生の自然体験が不足しているという調査結果がある。グループやクラスでの意見交流を通して自己の原体験度を認知し、自然体験学習への動機付けを行うことを提案するものである。

キーワード : 教員養成 自然体験学習 原体験度

1 はじめに

私事ではありますが、息子達がまだ小さかった頃、岡山自然教育会の例会に参加して、蒜山や三瓶山などで自然観察をしていた。山に登ったり、谷川や野原を走り回ったりして子供達はいつも大喜びで遊んでいた。自然は遊びの宝庫であり、放っておいても子供達は楽しく遊ぶことができる。しかし、そこに自然をよく知っている大人がうまく関わると、体験が格段に広がり深まることを目の当たりにした。

幼少期の自然体験は、認識の発達や感性の陶冶のために重要であり¹⁾、平成20年改訂の学習指導要領生活編においても内容及び内容の取り扱いの改善の項で「③自然の不思議さや面白さを実感する指導の充実」が示され、活動や体験の一層の充実が求められている。しかし、生活科に代表される幼少期の自然体験活動には明確な基準がなく、教師の力量や経験に依存する部分が多い²⁾。また、文部科学省の「青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議」の報告では以下のように「問題の所在」を示している。少し長くなるが本研究に関わる内容なので以下に引用する³⁾。